

## 全連退総会記念講演

「江戸の  
伝統文化に学ぶ」江戸東京  
博物館長 竹内 誠 先生

## 二二〇年の徳川の平和

江戸時代は文化・経済が発達した時代であります。なぜ発達したのか、それは平和が長く続いたからです。内乱がないという時代がいかに経済を発達させるか、文化を成熟させるかという、非常に良い歴史的なサンプルが江戸時代です。島原の乱以降、大塩平

八郎の乱などわずかな例外を除けば幕末の戊辰戦争まで日本は全くの平和な時代でした。権力者同士が武力をもって戦い合う戦国時代のような状況が二二〇年間なかったのです。なぜそれだけ泰平を保ち得たかは大きなテーマです。政策的には、権力者のみ武力を持ち、民間には武力を持たせないことが江戸時代に完全に徹底されました。さらには、参勤交代制度が、いかに幕府と藩との関係をきちんと保ったかということですが、そして、いわゆる鎖国という形の外交関係、対外関係を持ったことも二二〇年間平和が続いた重要な要素です。

この平和のお蔭で経済が非常に発達しました。江戸時代の社会は貨幣経済であります。江戸時代は自給自足的な封建社会と一般によくいますが、あれ程貨幣経済が発達した時代はありません。

そして、文化も非常に発展しました。元禄文化は清新な、澁刺とした文化であり、後期

の化政文化は爛熟文化であるなどよくいいました。泰平の世が長かったことよって、良い面ではなく、負の部分しか捉えない。その典型的な負の部分が発達している。現されている。小説はエロ・グロ・ナンセンス、歌舞伎はろくでもない、錦絵などはポンチ絵だと日本人の中には悪口を言う人もいます。歌舞伎は世界的な普遍性を持っています。錦絵はヨーロッパの印象派の画家たちが「こんなすごい絵はない」と高く評価しました。それに対して江戸の人びとは錦絵が一枚十文で買えるので、いかにも軽く思っています。すごい文化を築いたので、すごい文化を築いたので、だから、爛熟というより成熟という言葉を使った方がいいと思います。成熟文化は平和を大前提にしないと成立しません。

日本が明治維新を迎えてから一九四五年までの間、なんと戦争が多かったことか。外国と戦争を続けてきました。一九四五年から今日まで六〇

年余りは江戸時代と同じような平和な状況が続いています。しかし、これからさらに一六〇年間も平和を続けたいと江戸時代と同じにならないのです。江戸時代がいかにすごい時代かお分かりになると思います。

## 自然との共生

江戸時代ではどういう文化が展開したのでしょうか。人間の暮らしの中に文化の基底があると見えています。そこで今、江戸時代のライフスタイルの中で二つ、あえて特徴的なことを挙げてみます。まず一つは、自然との共生が江戸人の暮らしのスタイルだったことです。フォーチュンという人は、イギリスの園芸学者ですが、幕末に日本へやって来ます。そして、何か良い品種はないかと日本に滞在し、研究した人です。この人がこう言っています。「日本人の国民性の著しい特色は、下層階級（庶民）でもみな生来の花好きであるということだ。気晴らしに始終好きな植物を少

し育てて、無上の楽しみにしている。もしも花を愛する国民性が文化生活の高さを証明するものであるとすれば、日本の低い層の人びと（庶民）は、イギリスの同じ階級の人たちに較べると、ずっと優つて見える」（『暮末日本探訪記』より）と書いておられます。日本へ来て目立つことは、家は非常に小さいのだが、その裏庭とか坪庭に、本当に狭い庭だが、必ず植物を植えている。そしてそれを楽しんでいる。自然との共生です。その国民性に感動しています。この生活スタイルを実は今日でも日本人は色濃く持っています。下町などへ行きますと本当に狭い路地などでも植木を植えて、通る人の気分をとでも良くしてくれています。おそらく江戸のDNAが今日でも日本人の中に色濃く伝わっているのだと思います。植物は、短時間に育つものではなく、時間をかけて、手塩にかけて愛でるものです。したがって、人の営みが非常にスローにな

ります。じっくりと時間を味わえます。生活のめりはりを自然とともにゆくりとやわっていく。現代人と江戸人の最大の違いは、時間に対する観念の違いだと思います。江戸人は時間をじっくりと味わっていくのが一つのスタイルです。現代人は「時は金なり」という資本主義社会のど真ん中に生活していますから金を儲けるために常に動かなければならない。時を味わうという気にはなれない。時に追いかけられているのが現代人です。そういう中で本当の文化は生まれるものでしょうか。

### 人との共生

もう一つは、人との共生があります。エドワード・モースという人は皆さんよく知っていますと思います。明治の初めにやって来まして、大森貝塚を発見した人です。この人が東大で授業をしまして、東大から出て、本郷三丁目あたりから急いで新橋ステーションまで行こうと、人力車の待っている所へ寄っていったのです。「大学を出た時に、私は人力車夫が四人いる所に歩み寄った。私はアメリカの辻馬車屋がするように、彼らもまた揃って私の方に駆けつけるとのかなと思っていたが、事実はそれに反して一人がしゃがんで長さの異なった麦藁を四本拾い、そして籤を抽くのであった。運のいい一人が私を乗せて停車場に行くようになっても、他の三人は何ら嫌な感情を示さなかった」。

（『日本その日その日』より）とあります。籤は幼稚なようで最も公明正大です。そうすると争いにならない。天の声だと諦めるからさっぱりしていました。人との共生、こういうことを知識とはいわずに知恵というのですが、それを發揮したのです。

もう一つ、彼は驚きました。「汽車に間に合わせるためには、大いに急がねばならなかったのだ。途中、私の乗る人力車の車輪が前を行く人力車の甑（かま）にぶつかった。車夫たちはお互いに邪魔したことを微

笑で詫び合っただけで走り続けた。私は即刻この行為と、我が国（アメリカ）でこのような場合に必ず起こる罵詈雑言とを比較した」。日本人の場合、ぶつかった瞬間に「ごめんなさい」と両方が同時に言つて、微笑み合いながら清く別れました。お互いを思いやる、人と人との触れ合いを大切にしているのです。それは、競争社会のアメリカから来たモースにとって、びっくりする事柄だったので。

さらにモースは、「何度となく人力車に乗っている間に、私は車夫がいかに注意深く道路にいる猫や犬や鶏を避けるかに気が付いた」と記しているのです。人間を大切にしているだけでなく、生きとし生けるものすべての命を大切にしている日本人の心に敬意を払っています。

モースは続いてこういう経験をしています。彼は二年半程日本にいて、非常に日本通であります。五月二十八日に両国で花火がある。それを見

物するために舟で行った時のことです。「私は川を開くというお祭りに行った。(中略)船頭たちは長い竿で、舟を避け合ったり、助け合ったりしたが、この大混雑の中でさえ、不機嫌な言葉を発する者は一人もなく、ただ、『アリガトウ』『アリガトウ』『アリガトウ』あるいは『ゴメンナサイ』だけであった」と言っているのです。前述の人力車夫たちから受けたと同じような感性を船頭たちからも受けたのです。かくのごとき優雅さと温厚さ、日本人がすばらしいジェントルマンであるということをもースは車夫や船頭たちから教わったのです。これらは明治十年頃の話ですが、モースが見た船頭や車夫たちは、江戸時代に生まれ、江戸時代の家庭、そして地域、そして寺子屋で育った人たちです。その人たちの人格がこの姿なのです。

自然を愛するとか、人と人が共生する暮しが江戸時代にはあったのです。今でもこうした江戸のDNAを多くの人が

は持ち続けているはずなのです。自然との共生や人との共生の心が薄れつつある現代、ぜひとも江戸の原点に帰って考えていただければと思っています。

### 行動文化

江戸時代の行楽というのは、自然の豊かな神社や仏閣に行つて楽しむものでした。信仰と、娯楽がセットになつていました。おまけにそこには美味いものも売っていました。『世事見聞録』という随筆ですが、こんな話があります。夫が朝早く市場へ行つて野菜や魚を仕入れて、天秤棒を担いで、「だいこん」とか「ごんぼう」といいながら一日中売り歩くのです。「妻は夫の留守を幸いに、近所合壁の女房同志寄り集まり」壁を合わせるというのですから長屋です。長屋のかみさん連中が井戸が一つしかないので皆集まつてくる。トイレも共同、ごみためも共同ですから、いつも顔を合わせます。これで喧嘩をしたら暮らしが成り立た

ない。譲り合つて、思いやりを持つて生活しています。その井戸端会議で「己が夫を不甲斐性ものに申しなし」。いい会話ですね。「うちの亭主は甲斐性がないから」と、これでは喧嘩にならない。一人がそういう発言をすると、「いいえ、うちの亭主はもつと甲斐性がないよ」と言う。この会話の大切さ。これでは喧嘩にならない。「遊山物参り等に同道いたし、雑司谷・堀之内・目黒・亀戸・王子・深川・隅田川・梅若などへ参り、」そういう名所旧跡のある所へ連れ立って行きます。「またこの道筋、近來料理茶屋・水茶屋の類沢山出来たる故、右等の所へ立ち入り、又は二階などへ上がり金銭を費やしてゆるゆるの休息し(後略)」。これは江戸時代の話なのです。旦那が働いている間に奥さんたちが何人かお揃いで料理屋へ行つて楽しんでい

る。暮らしの中でこういう楽しみをすることは、一つの行動文化です。自然を楽しむという気持ちと、人と人がお互い助け合う。絆がないとこういう行動にはなりません。隣近所で行くところが良いところですよ。

### 手作りの文化の極致

江戸の伝統文化を考えた時に、その基盤になるものがあります。一つ目は、日本人は大変手が器用なのです。結構細かいことになると外国人は出来ない。そこへいくと日本人は出来てしまうのです。でも、それは訓練しないとかなかなか出来るものではありません。日本には徒弟制度がありました。日本にはほとんど手仕事の技は磨かれていくのです。外国だつてマイスターといつて職人で上手な手技の人は同じような歴史を歩んできているのですが、十八世紀末にヨーロッパに産業革命が起こりまして、機械が蒸気で動くようになり、手をしだいに使わなくなり、手は使われなくなりました。日本人はその時まだ産業革命、蒸気機関を知らないのです。そのまままだ手が動いているわけです。日本



では、宝暦の頃から幕末までの間にものすごい手技が展開されていきます。最近、嘉永文化ということを言う人がいます。嘉永はペリーが日本にやって来た時の年号です。その頃がおそらく日本人の手作りの技が極致に達していた頃だと思われれます。

シュリーマンというドイツの考古学者（トロイの遺跡を発掘した人）がいます。この人は貿易で大金持ちになった人で、遺跡を発掘する前に世界漫遊で日本にやって来ます。そこでこういうことを言っています。「もし文明という言葉が物質文明を指すならば、日本人はきわめて文明化されているといえるだろう。なぜなら日本人は、工芸品において蒸気機関を使わずに達することのできる最高の完成度に達しているからである」（『シュリーマン旅行記』より）と。すごいほめ言葉です。

花見に持っていく手提げの重箱などには精緻な技法により、蛇腹の携帯用酒入れが付けられています。根付は煙草入れを腰に挿しておく時に落ちないようにするために付けるものです。その根付には細かな彫刻が施されています。よくも彫れたと思う程、技が優れているのです。これも外国人はびっくりすることなのです。日本では、大企業の下請けの町工場がたくさんあります。宇宙船の、ある部分のネジはあの町工場のあの親方が作るものでなければいけないのです。同じようにコンピュータを使うているのだけでも、操作するのは人間の手ですから、そのところで伝統というか手作りというか日本人独特のものがあるのです。

### 寺子屋の普及

#### — 世界一の識字率 —

もう一つは、寺子屋の普及です。日本人は世界で一番識字率が高いと外国の人が言っているのです。しかし、日本のデータを見てもどこにも出

てこないのです。落語を聞くと、日本人は江戸時代は文字が読めなかった。長屋で読めるのは大家さんだけだった。だから手紙が来ると全部大家さんの所へ持って行って読んでもらった、と。皆それを信用してしまったのです。実は字がものすごく読めたのです。前出のシュリーマンは、「教育はヨーロッパの文明国家以上に行き渡っている。清国を含めてアジアの他の国では女たちが完全な無知の中に放置されているのに対して、日本では、男も女もみな仮名と漢字で読み書きができる」と書いています。皆というのは嘘ですけれど、男も女もと書いてあります。女の人もよく読めたのです。

### 錦絵の誕生

錦絵というものがありません。今では世界的なものです。北斎といったら外国人はみな知っています。浮世絵は今では一枚何万円どころではない。写楽などは一億円ですから。それを日本人は日常的に見て

いたのです。安い値段でしたから。役者が好きなら役者絵を、当時のミス江戸についての美人画を、みな買ったのです。多色摺り版画という、十何色擦ってもずれない、大した腕です。こういう高度な錦絵をまず外国人がびっくりして、日本人とはこんなにすごい民族かと驚いたのです。ゴッホやマネが日本の錦絵を真似しました。日本人はあわてて「そんなにいいの」となる。日本的な個性が世界的な普遍性を持つ。江戸文化はすごいのです。

### 川柳の誕生

人間はギスギスしていたら共生はできないのです。どこかで人間性豊かなものを持たないといけない。人間性豊かということとは、ヒューモア。ヒューモアはユーモアなのです。本当にほのぼのと、人の温かみとか温もりとか人情の機微の表現がユーモアです。その代表的なものが川柳です。江戸時代に生まれた伝統文化で、今でも現代文化の中で生

きているでしょう。川柳は、人情の機微というものを表現する文化です。「本降りになつて出ていく雨宿り」。急に夕立が降ってくる。あと少し行けばわが家だけれど、思わず軒下に雨宿りをする。その間にだんだん雨が激しくなってくる。そうすると人間は錯覚を起こすのですね。未来永劫止まないのではないかと。これではしょうがないといつて、どしゃ降りの中に飛び出していく。こういうほほえましい人情の機微を詠んでいるのです。

多くの人に読まれた黄表紙

字が読めるとなれば、いくらでも本は売れます。江戸時代はたくさん本が出ています。黄表紙などというものは、大人のマンガみたいな大衆小説ですから、売れた本は一万七千部も売れたのです。黄表紙は黄色い表紙で、大人のマンガ本ですから絵が描いてあつて、言葉が書いてある。この絵（レジュメの）などを例を挙げますと、「金々先生栄花

夢」の冒頭シーンです。田舎暮らしに飽きた人が、江戸で楽しい生活をしたい、金持ちになりたいと思つて、出てきます。目黒のお不動様が江戸に入る入り口ですから、そこで江戸での生活の成功を祈つてお参りをします。茶店で名物の栗餅を売っている。これを注文したのです。待つている間に、神田の和泉屋さんという大金持ちから「あなたこそわが家の婿さんになる人だ」と言われて、駕籠に乗せられて家へ連れていかれます。栄耀栄華、飲んで食べて遊んでとさんざんやっていこううちに、さすがの大金持ちも金がだんだんなくなつてきます。急にさつきまでのチャホヤがなくなる。人とはこんなに人情が薄いのか、金持ちとはこんなものか、江戸という都会はこんなものか、もう田舎に帰ろうと思つた。そうしたら、「お客さん、栗餅ができましたよ」という話なのです。ついまどろんでいる一睡の夢が、今見たものだった。結局金持

ちとはこんなものか、江戸とはこんな所か、故郷の方が余程いいやといつて、江戸に入らずに踵を返して故郷に帰つたとさといふ話なのです。

もう一つ、唐来参和の「莫切自根金生木」これは題名が「きるなのきからかねのなるき」というもので、下から読んで同じ回文になつて居るのです。今度の主人公は、大金持ちなのです。金持ちに飽きて貧乏になりたいというのです。貧乏になるためにあらゆる手段を尽くすのです。しかし、博打を打てばどんどん当たる。富籤を買つてまた当たつてしまふ。金貸しをしてても、借りた人たちが利息を付けて返してくる。泥棒に盗ませようとしても失敗する。この本の最後の場面は、この大金持ちが寝る所がなくなつて、万両箱の間の狭い所に立つて生活していかなくてはならない。貧乏になるなどとい

うぜいたくな希望はあきらめましたというのです。馬鹿馬鹿しいですね。馬鹿馬鹿しくてナンセンスなのですが、しかし人生の何かを語つてくれる。庶民はこれを読んで笑ひながらそれぞれの人生を教わつたのです。溢れるばかりの印刷物だが多くの内容があり、沢山読まれました。

江戸という時代はこういう時代なのです。こういう伝統文化を現代流にいか再生させていくのか、どうやったら今日の子どもたちの教育に生かしていけるのかということが課題になると思つています。ご静聴ありがとうございました。



唐来参和「莫切自根金生木」

(飛騨のシーン)